

放送人の会

NO・18

2004・2・10
発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階
Tel & fax 03-3221-0019
E-mail info@hosojin.com

代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

もつと内部を、もつと現役を

《私の初夢》

大山 勝美

「放送人の会」は韓国にもあった。昨年十月、済州島で日・韓・中テレビ制作者フォーラムが行われ参加した。四年前、熊本村上雅通氏らが中心になり、日・韓の制作者の個人的な話し合いの会からスタートし、関釜連絡船上、対馬とつづき、昨年中国にも声をかけ規模を拡大、番組視聴、討論を充実した二日間だった。韓国は政府も力を入れ、KBS社長はじめ放送界の要人が顔を揃え、中国チームは国の経済の勢いを直接に反映して、活気があり、「ぜひ、来年は中国で」と張り切っていた。

ところで「放送人の会」の話である。韓国の年配者は流暢な日本語を操る。私が「放送人の会」の説明をはじめると、「ああ、韓国にも同名の会があります」との返事。会員は約2千人、現役とOB制作者関係者ほぼ全員が加入していて、会長は前MBC社長である。きけば中国にも同様の会があった。名称は「テレビ芸術家協会」。OBが主体だが現役の制作者マンも加入していて、会員約2万人。会長は前CCTVの社長だとい

う。何も韓国・中国なみの規模をうらやましがって紹介したわけではない。現役との関わり薄い「放送人の会」は名前負けではないのか。日本でも現役の制作者マンが加入したがる会にするにはどうすべきか、課題を改めてつきつけられた、と言いたかったから紹介したまでである。

昨年は「人気番組メモリー」など新事業や超地域をクリアした「地域番組フォーラム in 横浜」というビッグイベントがあり、幹事の方々が中心に結果的に無理をお願いしつづけたと身をすくめているのだ。

ことしはもつと内部に眼を向けて会員の方々が積極参加の意欲がわく企画を実現できればと願っている。会員相互の親睦交流を促す企画「面白くて為になる」企画である。同時に現場の中枢にいる人たちを惹きつけ新人会員獲得につながる魅力的な企画としたいであろうか。放送界に対する一般市民の関心を高める啓蒙的な役割は、十分に実績を示している。制作現場との接点を重視した催しの計画が欲しい。

具体例でいえば受賞番組や人気番組の制作者を招き、番組を見たあと酒を酌み交わし、リラクセスした雰囲気でお話者と懇談する会合だ。一昨年木村栄文氏の初ドラマをみて懇談会を開いた。専門的な分析がつき興味ぶかい議論がはずんだ。

当会が発足する前、世話人たちが集まって大真面目に議論のあとアルコールを少し入れての話題百般の雑談がつづいた。「あれがじつに有意義

で楽しかった」と今野勉氏はいまもしみじみ語っている。

すこし広げて現在の風を学習する会にしてもいい。ゲストは異業種の人や面白い人。勉強会、研究会という固くなるから「放送人サロン」が風流でいいかも知れない。

場所としては耳寄りの情報がある。これまで毎月の幹事会場に使用してもらった広尾の「コレド」が乃木坂の地下鉄駅の近くに移動して再開するのだ。責任者は会員の桃井章氏。

嬉しいことにスペースが広がる。ミニシアターとしても使用できるほどで約六十坪。七・八十人は入れるという。二月中旬オープン予定。こ

こなど有力な候補地である。

じつは会員には一芸にひいでた芸人と趣味人が多い。フルートの名手は伊藤雅浩氏。磯村健一氏のピアノも玄人はだした。昨年の忘年会での二人のデュエットは聞かせた。岡崎栄氏の趣味は銭湯めぐり。俳人は松尾羊一、川口名誉会長、鶴橋康夫氏は多作を誇る。ゴルフは堀川とんこ、遠藤利男氏。朗読は加賀美幸子氏。江戸史蹟めぐりや囲碁の名人もいる。学生気分の名作の輪読会も捨てがたい。文筆家もいる。片島紀男氏の「三好十郎」論は直接聞いてみたい。石を投げれば志をもつ一人多芸の人に当たる豊かな会なのだ。

「おい気軽に顔だせや、面白いことやってるぞ」といふ現場にいる後輩たちに胸はって声をかけられる、そんな会にしたい。これが2004年の私の初夢である。

鶴沼だより①

終わりある戦い

名誉顧問 川口幹夫

古い年が歴史の後方へ消えて新しい年がきた。去年もそうだったが、ことしも又新しい年に期待は少なうだ。

理由の一は、やはり国対国、民族対民族という争いはなくなりそうもないことだ。もう一つの理由は人間という存在の基本に「排他」つまり、他人を排除してでも自分を主張したい、というまことに困った感情があるからだ。この二つの理由がある限り、世界には永遠に平和がやっつてこない。

でももういい加減に、この困った戦いは終わりにしないか。私は幼い時、小児喘息にかかった。こいつにかかったが最後、凄絶な戦いは一向治まらないのだ。まず少年時代、顔を真っ赤にしていくら咳をしても咳は治まらない。ヒーヒーやゼーゼーの繰り返しは殆んど無期限に続く。もう終わりか、と思う頃やっとなんか終わる。

そして青年時代、発作は続いて起る。だが次第に発作はゆるやかになつてゆく。多くの人が「もしや?」と治ったのか、と喜ぶ時期だ。青年時代は喘息の方も、息をひそめて小

くなっているらしい。壮年時代の終わり、私でいえば四十三歳の時だった。

突如、息高らかに喘息は逆襲してくる。「忘れてはいないな? オレの強烈なアタックを忘れたか!」そういう感じで四十代の逆襲がやってくる。この頃、幸いにして抗喘息剤として多数の新薬が作られたから多くの人はその幸せを享受している。

だが五十を越えて体力が衰えてくると喘息は猛然と襲いかかってくるのだ。

新しく開発された薬の効用で大分ラクにはなつてくるが、でも消え失せることはない。平成三年NHK会長として私が中国を訪ねた時、ちょうど発作が起つた。中国には有名な中国医師—中医がある。業務の間を縫って有名な中医の診断を仰いだ。診断十分。中医殿はゆつたり当方を向いた。「さては何かよき診断か?」期待する私に「×△○:△×□○×△:」

通訳がおもむろにいう。「会長の喘息は治りません。ただし喘息ではなかなか死にません。どうか長いおつきあいを:」なるほど長いおつきあいか。

この終わりまで勝負のつかない戦いに私は毎年臨んでいる。

昨年も激しい発作が出た。でも耐えた。ぐつと耐えた。冬来たりなば春遠からじ。勝つことはなくともまけないのだ。

InterBEE2003シンポ 「放送・新放送」の未来を読む

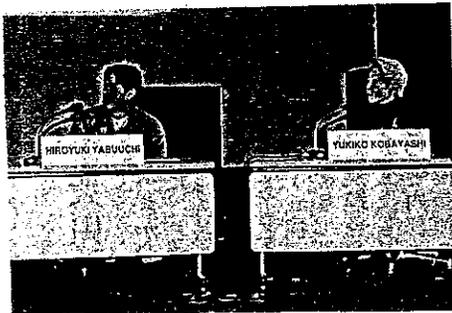
幕張討論会「私が創りたいドラマ」フイクションとノンフイクションの間」では昨年十一月二十日午後一時から、大山代表幹事の挨拶に始まつて、藪内広之氏「全編『やらせ』のドキュメンタリーを目標して」、小林由紀子氏「ありきたりでない日常」、岡崎栄氏「ノンフイクションという創作」の順で発表、今野勉氏の司会で活発な議論を交わした。

先ず藪内氏「ごきげんいかが? していべア」は徹底したドキュメンタリー手法による少女の母恋いの記で、日頃の典型的ドラマと如何に違えるかに腐心した。小林氏は朝ドラマ『はね駒』中、主張を凝縮した一回を映

してテーマ内容の社会性ノンフイクション性に言及、手法のノンフイクション性とテーマのそれというキーワードを提示。岡崎氏はエッセイドラマ『家族』の幕切れでドラマが原点事実を越えてしまった例を示してフイクション・ノンフイクションの区別はもう要らぬと説き、今野勉氏も両者の境界は無くなりつつあると検証、新表現の発見に希望を託して締めくくった。

非常に充実した内容なのに客数がすくなく残念でした。今秋は多数会員の来聴を期待します。

齋明寺以玖子



藪内広之氏

小林由紀子氏



今野 勉氏



岡崎 栄氏

昨二〇〇三年十二月、地上デジタル放送が始まった。視聴者から見ても大きな変化は端末の多様化である。

第一。昨年来急速に人気上昇中ノプラズマや液晶による大型ディスプレイの登場は、いよいよ高品質映像・HDテレビによる豪華なホームシアターの実現を予感させている。二度にわたる皇太子のご結婚を始めスポーツ、コンサート、大型のイベント、祭り、ドラマ、映画：と五〇年間、大型キラーコンテンツを放送し続けてきた地上テレビにHDはよく似合う。地上テレビのHD番組は半端ではない。おそらく今の高視聴率番組はあつという間に全部HD化されるだろう。感動も昂奮も倍以上になる。

第二。その反対にポケットに収まる携帯テレビの登場も楽しみだ。1セグサービスと呼ばれるデータ放送の一種であるが、HD番組などのいわば「本編」とは別のチャンネルで、スタンダードに近い画質で動画番組を見ることが出来る。

これはデジタル波の優れた安定性を利用した地上放送だけの得意技と云っていいだろう。

出勤、登校前の情報番組、朝のワイドショーは今でも良く見られているが、昼休みやアフター5のOLや放課後の学生たちに手の切れるような

「今」を共有してもらおう「けいたいテレビ」向け情報、これは面白そうだ。つまり固定テレビ時代にはテレビが見られなかった時間帯が若者にとつては新しいゴールデンタイムになる。

第三。おそらく今年以降売り出されるパソコンには地上デジタル放送のチューナーが内蔵されるようになるに違いない。その台数もこれまた半端ではないだろう。今やパソコンは音楽メディアとして主流になりつつある。同じようにテレビ受像機の主流がパソコンになってもおかしい

どう変わるのか地上デジタル放送

日本民間放送連盟地上デジタル放送特別委員会委員長
株式会社 テレビ新潟放送網 代表取締役会長

北川 信

地上専用テレビ。

パソテレの最大の特徴は、最初からインターネットに(多分殆どが)つながっていることだ。この事でテレビの使い方が飛躍的に変わっていく。今、アナログでもやっているテレショップとネット販売がつながり、便利になるのではないだろうか。テレビによる衝動買いや、探しやすさや、商品イメージがふくらみ、連動してインターネットで素早く契約が出来る。さらに刺激されて別のモデルに行ったりする。こうなるとポータルだったテレビ局に手数料は入

い分け、ハイブリッドなどところである。デジタル化によってテレビ端末が増え、多様化し、視聴モードも多様化すればその特性は拡大されていく。マスメディアとしての大量宣伝効果と同時にパーソナル化に対応したきめ細かいアプローチも可能になる。

地方局を含めてマルチメディア化が進むだろう。インターネットとの相互乗り入れはこれまで述べたとおりであり、双方向サービスの実績が重なればそれなりの消費者動向などのマーケット情報を獲得することも出来る。営業の幅も深さも大きくなる事によりデジタル化が進行してゆく。

くない。テレビ受像機という昭和三十年代には仏壇のように観音扉がついたのがあった。それを一家全員で観た。最近では軽い液晶テレビを勝手にキッチンや風呂場にぶら下げていつて見る。おそらく二台目、三台目のパソテレになるだろう。文字通りパーソナルテレビ、僕の、私の別テレビ。ここでも地上デジタル放送の変調方式、OFDMが威力を発揮する。うまくすれば室内アンテナで見えてしまうことも少なくないはずだ。ネットの接続も無線LAN、ということになれば全く持ち運び自由、

らないが、マーケット全体から見れば販売量は大きく増える。テレビとインターネットの相乗効果。このケースは本格的な双方向サービスの出発点になる。課金や認証のあり方やセキュリティの確保など放送局側に残された課題が大きい。しかし今後の取り組み如何では自治体などの公共サービス機能の支援など、方向が見えてくるに違いない。広告メディアとしての展望にもふれておこう。現在、地上民放ネットワークの最大の特徴は全国情報(CM)と地域情報(CM)の関連な使

最後に。問題は放送の本身。ハードの変貌にふさわしいソフトの自己変革は進むのだろうか。それは、これからのテレビ制作者の仕事である。期待しよう。

2004 甲申歳

会員年賀状拾遺

勝部領樹

二〇〇四年の新春を寿ぎ、皆様の御多幸を祈ります。日本の堅実な姿への回帰、地球環境と世界の世情の平安への確かな足取りを今年の念願といたします。放送人の会も本格軌道に向け発車の年となりますよう。

島野功緒

昨夏 前立腺肥大手術に成功、おかげさまで春空に舞う心地です。今年もよろしくお願い申し上げます。

重延浩

あけましておめでとーございませう。アメリカの数学者バックミンスター・フラーは晩年、科学的に自分を分析しています。「私は、いま87歳。これまで800トンの食物や水や空気を、食べ、飲み、呼吸してきた。それらは私の髪になり、皮となり、やがて消えていった。私の体は7年ごとにすべて入れ替わってきた」。そんな生の繰り返しの中で、人間ができることは何かをフラー氏は静かに語ります。

「自分が正しいと思うことがあれば、それをとことん追いかけて、その中にほんとうの重要なことがあるかどうか、自分で発見しなければならぬ。」
どうやら自分自身の求道の中に真実が見えるらしいです。良い年でありますように。

堀川とんこ

明けましておめでとーございませう。テレビドラマは、こういう時代にひよつとして新しいステージを迎えるのかもしれない。フリーになってやがて3年になります。十分な時間を生かして、未知の世界に乗り出したいと思っています。放送人の会の会報がめつきり楽しくなりました。

宇野昭

新しい年↓04、世に言う《喜寿》を迎えます。…が、無邪気に欣んでは居られません。「日の丸」「君が代」辺りを、見逃したのがいけなかったようです。加速して、「海外派兵」です。《地上波デジタル化》などで浮かれていられない心境です。「わだつみの声」に耳を傾け、《新聞力》《放送力》の出番をいまこそ期待して。

迎春

近藤晋

まだ何か振る気か、と問われれば顔赤らめつつも「もう二つ、三つ…ししゃかと立ってやるつもりです」。映画「レディージョーカー」を撮り終えた所で



注：上記 木版画は頌春にちなみ、斎戒沐浴の伊藤雅浩「画伯」制作による。氏によれば、猿に烏帽子の真意とは人柄にふさわしくない服装や言動の人間風刺の絵柄だという。

市岡康子

す。表現まで気狂いになって六年かかりました。さてこれからは…何かとご教示頂けるなら幸甚です。

今年が開学以来はじめての卒業生が旅立ちます。ゼミ生たちはそれぞれ単独で卒業制作に取り組みました。テーマは多彩で、野外活動の中から他者との関係構築や協働を学ぶ新しい教育法、大阪城公園のホームレス、大学の女子バレー部の快進撃などがあります。アマチュアの映像コンクールなどでは自分探しのテーマが多いといわれていますので、ゼミ生たちの外向きの関心は嬉しいことです。
今年別府でお正月。宇佐八幡宮に参詣して、遙か大分から皆様のご多幸をお祈りすることにいたします。
(立命館大学アジア太平洋大学)

和田勉

こぶさたをしています。小生今年、岩波から一冊本を出し、映画を一本作ります。

磯村健二

テレビ朝日在職中は大変お世話になりました。「モデラート」も少しづつ運転を開始いたします。本年もよろしく…

今野勉

あけましておめでとうございます

汽車は 銀河系の玲瓏レンズ 巨きな水素のりんごの中を かけている

宮沢賢治『青森挽歌』 銀河鉄道のイメージの誕生です。2004年の夢を託して！。

鶴橋康夫

折るとき人は独りや花菜風

青春、朱夏、白秋、玄冬、去年もまたドラマの神様に抱かれて生きる事ができました。六月、TBSで放送の『龍神町十三番地』、今春三月、テレビ朝日で放送の『若なき者』（野崎尚脚本、宇崎竜童音楽、役所広司、鈴木京香、妻夫木聡ほか出演）の二本です。皆様のお陰です。ありがとうございしました。

緩むのは薔薇の花弁に帯の紐

六キロ太りました。起き抜けに二膳イラク徴兵される夢を見て二膳、ベルトを拒否するように、ぼつてりとお腹が膨らみます。一本足で立てない鶴になりました。

「春だね」と吹き出しつけて犬にいい

よい年になりますように。

藤久ミネ

あけましておめでとうございます

駄犬一匹蹄を噛みつつ齒さす

夕陽の坂を馳せ下るかも

坂元良江

新しい年を迎え、世界は、日本はどうなっていくのか見当もつきません。こんな気持ちで年賀状を書くのは初めて、と思っています。江戸時代から古民家を「松蔭コモンズ」と名づけて多世代の男女7人で暮らし始めて丸2年になろうとしています。広い座敷を開いて、セミナー、ライブ、展示会、先日は落語会も催しました。是非一度お出かけください。テレビマンユニオンの仕事も相変わらずです。最近NHK『課外授業 ようこそ先輩』を担当しています。

村木良彦

新年おめでとうございます
昨年は中断されていた「地方の時代」映像祭を川崎市と東京国際大学の新たな参加を得て復活でき、プロデューサーとして思い万感でした。
3年目を迎える大学では「国際報道論」「メディア環境論」「報道表現演習」「演習テレビドキュメント」研究

「演習メディア生態学序論」、大学院で「国際報道論研究」を担当、今年の「地方の時代」映像祭は十月二日(土)から開催予定、一層充実させるべく準備に入っています。今年もどうぞよろしく御願ひ致します。

大和定次

去年の秋、キングレコードから「ザ・音職人」というCDを出しました。口、手、足、道具を使い、本物より本物らしい究極のアナログ効果音・77個で構成しました。独自に開発したのも加えました。放送文化を支えてきた擬音効果音ノウハウを伝えていきたい、そして更に現代に生かしてもらいたいというのが目的です。

村上雅通

今年もよろしくお願ひします。
昨年は南ロシア、中央アジア、韓国、対馬を巡り、2本の番組を作りました。『探訪！国境の港町』（1月4日 九州地区）および『流転〜追放の高麗人と日本のメロデー』（2月11日 全国ネット。東京はテレビ朝）。よろしければご覧ください。（熊本放送）

石橋冠

「放送人の会」に入って良かったこと

とは、自分もまた「放送人」であったと自覚したことでした。…今后ともよろしく。元気な年でありますように。

片岡敬司

この春には、古代史ドラマ『大化の改新』を撮ります。京都の映画スタッフと組んだ、新しいスタイルのドラマです。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

大山勝美

ことしは年男です。よく見ざる、よく聴きざる、少し言いざる、の三猿を心がけ、体調と相談しながら、マイペースで参ろうかと存じます。ことしも何卒、よろしくお願ひ申し上げます。

松尾羊一

小生、昨年末に自転車転倒肋骨二本骨折の奇禍に遭い、全治一ヶ月の由七転八倒の日々。笑うと激痛が走る始末。塩梅や如何にと新春お笑い番組の数々を見まくるも一向に笑えず。テレビ局とタレント御一同様のご配慮に感謝した三ヶ日でした。皆様におかれましても、折角酒気帯びチャリンコは天罰観面ゆえ、ご無用にて敝にお慎みあれ。切に。

テレビ50年 放送の本質論を めぐる白熱の論議!

テレビ50年の節目は折しもデジタル放送開始年に重なり放送界は華やかにその将来像を描き、テレビ史的な回顧特番編成によってテレビ発達の史的視野から番組イベントを連打した。

しかし、テレビが戦後と現代日本の社会と生活の構造に及ぼした影響から放送文化の本質論をめぐる論議はなぜか不毛のままに終始した。視聴率調査をめぐる不祥事が世間を騒がせ、テレビメディアの表と裏の二つの顔について問題提起をしたのは皮肉であった。

04年2月8日、『放送人の会』及び『放送芸術学会』の共同主催で早大総合学術情報センターにおいてシンポジウムを企画した本意もそこにある。テレビ界が避けて通った本質論の掘り起こしへの試みであった。

会場にはメディア専攻の学生たち、各新聞学芸部記者、関連業界など多様な観客層がみられ(百五十名余)、日本人とテレビ文化を中心に進行、充実した討議が展開された。

パネリストは各界から

- ・加藤秀俊(元京大人文研、社会学者)
- ・吉田直哉(前NHKディレクター)
- ・重村一(スカイパークTV社長)



加藤秀俊氏



重村一氏

吉田望氏



公開シ

テレビは日本ノ

・蟹瀬誠一（TV & R キャスター）
以上の各氏……

まずテレビは50年の間に「一億総白痴化」の聖俗論から一億総出演者化、総演出家化に転移してお互いに現実を加工し合い、是非はともかく壮大な「演出社会」を生み出すにいたった

（加藤氏）。その論旨をふまえて展開、既成のテレビエリート観の崩壊にともしない数値社会を超える知の構築（吉田望氏）、テレビが培った技術伝承における匠の思想を（重村氏）、また視聴率問題の本質をインドの哲学者の言葉をもひいて「21世紀最大の課題は、数値万能の20世紀型決定論を超えることである」それには制作者の志の復権であるなど（吉田直哉氏）など、興味深い論点が蟹瀬氏の巧みな整理誘導で明示され中味の濃いシンポジウムになった。

（記 編集部）

「放送人の証言」レポート

久野 浩平

「放送人の証言」は当会の性格上どうしてもプロデューサー、ディレクターの「証言」が多数を占めますが、それ以外の、番組放送の際「スタッフ」と表記される技術、美術の方々の「証言」もかなりの数、収録されています。今回はこのジャンル

の「証言」をまとめて紹介します。BKの音響効果の長老辻好雄さんと作本秀信さん、美術デザイナーの橋本深さんの「証言」はすでに紹介しました。最初は武谷雅博さんの「証言」です。武谷さんは一九五四年テレビ開



蟹瀬 誠一氏(司会)



吉田直哉氏

局直前のTBS（当時はラジオ東京テレビ）に入社、VEからカメラマンと一貫してテレビ制作の現場に身を置く一方、その経験反省を生かしてスタジオカメラの開発に生漕取り組み続けます。カメラを作ったメーカーの設計者は放送局のカメラマンはやらないんですよ。住宅の場合はね、設計者も家に住んでるんですよ。自動車の設計者は自分で自動車を運転してるんですよ。（中略）だからどう扱い難

い自分で分かる。ところがカメラの設計者というのはカメラを使わない。だからユーザーの言うこともあなた方はもったときかなきゃいけないんだ。」

黒白に深い艶があつたモノクロ時代のTBSの画調は、武谷さんが英国のEEVと協力した撮像管の改革によるものでした。レンズの改良、無調整カメラ、ズーム専用機、カラー時代になってからは民放各社統一カメラの開発など、武谷さんの「証



「言」は瞳目すべきものです。もう一言。

「いい番組のためにはやっぱいい道具がいる。この実感が非常に大きかった(中略)そういうけど技術はサポートですよ、サポートといっても結果は大きいなあ」

武谷さんとほぼ同時期にTBS入社、カメラマン、TDとして活躍した吉本琢也さんの「証言」もまた本格的なハンディカメラの開発について語ります。

「今までのスタジオカメラってのは、スタジオのカメラという発想で、カメラが出来たからそれを使ってドラマや番組を作っていた。そうじゃなくて、スタジオで人間が使える重さの限界はどの位かということから逆にカメラの設計を始めたんですよ。」

「それで、大体構想が固まって実験、ま、画が出るか出ないか位の実験が終わった所で田中さんが行くって話になって(一九七二年田中角栄訪中)で、ま、突貫工事で訪中前一週間位までに組んで飛行機で運んだわけですけど(中略)でも、ま、よく動いたもんですよ、もしかしたら駄目なんじゃないかと思つてましたからね」

吉本さんの「証言」は「日真名氏とび出す」から始まり週五本のドラマの現場に入らなければならなかった開局初期の技術習練、方法論の発見など興味深い思ひ出が続きます。岩井禧周さんは大映で宮川一夫氏

に師事したあと、一九五八年NHK入社、フィルムカメラの名手として数々の番組に参加しました。吉田直哉さんと協力し「日本の素顔」から「未来への遺産」に至る作品群「日本の紋様」、三年がかりの名作「日本の稲作」の思ひ出など岩井さんの「証言」は貴重なものです。

「で、バカと埃は上にあがるって、僕はヘリコが好きだったけど、たまたま『太閤記』がきっかけになって、それはやっぱフィルムだからできたということでしょうね」

岩井さんはヘリコプター防振撮影装置の開発を志し年間二百時間ものフライトで改良、テストを重ね遂に成功したのです。

「吉田直哉さんが岩井工務店なんてニックネームをつけたのは、つまりいろんな番組撮る時にやっぱ道具がちよつとあると他人と違ったことが出来るってことでは。こりや今でもあるんじゃないですか、世の中に、あの、ま、迷迷名カメラマンと称するのは、やっぱ道具を作り出すよ、結構……」

TBSのミキサ―石川純昌さんの「証言」もあります。石川さんはテレビ開局と同時に入社、マスターのミキサ―、そのあとスタジオ制作のミキサ―として活躍しました。ナマ時代のスタジオでのオーディオセクションの困難な立場、技術上の問題点、フキカエの技術開発など石川さんの「証言」は多様です。石川さん

もまた道具を作った思ひ出を述べています。

「ニュース番組でも、アナウンサーがこうキューを出すのに、テレビの画面モニターですね、アナブースの中の、勿論モノクロですけど、画面赤くしたらいいじゃないかって、その一言で(上司が)石川君うまくその小さなランプ四つ埋め込みなよとか言つてね、で、結構効率よく働いたし……」

大友虎勝さんもテレビ開局と同時にTBSに入社しました。大友さんはマスター、テレシネ、キネレコと「縁の下の力持ち」的なセクションを経て、一九五八年四月VTR導入に立ち会うことになりました。日本のVTR導入は大坂のOTVがTBSに一月先行しましたが、その経緯について大友さんの「証言」は当時OTVにいた吉村繁雄さんの「証言」と対照することが出来ます。テレビドラマの古典「私は具になりました」のVTRが辛うじて現存出来た事情、CBSの依頼によるヴェトナム戦時の米軍のVTR裏送りの秘話など興味深い話が続きます。大友さんは最後に付け加えます。

「私らが現場にいた時分はね、やつぱしメーカーがまだ後追いね(中略)まだ局の方がね、指導的立場でありまして……例えば「プロジェクトX」ってNHKで番組ありますね(中略)やっぱ現場で物を作る楽しみとかね、うか、満足感というのはよく分かる

気がしますけどね」

最後に、照明家加藤静夫さんの「証言」です。加藤さんもテレビ開局と共にTBSに入社、逆光をキーライトに使った独特の照明設計で「逆光の加藤」「片明かりの加藤」と仇名される活躍を見せました。現代劇から時代劇、悲劇も喜劇も作品の特性を生かす照明技法について、又、舞台、映画、テレビを横断する照明家協会の設立とその理想など、加藤さんの「証言」は興味尽きないものがあります。加藤さんを貫く信念は「挑戦」です。

「ま、根本的な、僕の個人的な考えですけども、(科学)技術なんてどつちみち進歩するだろうと、だからそれにこだわって抑えちゃうと、要するにテクニクを抑えちゃうとそれなりのものしかできないから、絶対えず挑戦していくという、破壊するところから始まるような、要するに自分なりの理屈をつけてですね、挑戦して行ったということもありますね。」

以上、今回はスタッフの方々の「証言」をまとめてみました。が、弁解するまでもなく収録された「証言」はTBS出身者に大きく偏っています。テレビ開局で先行したNHK、NTVの技術の皆さんの「証言」、それに各社の美術関係者の方々の「証言」をもっと数多く収録しなくてはと痛感した次第です。

ラジオの広場

せりふ

島地純

勤めをリタイアしてから、芝居にかかわる機会が多くなった。いまや主流になっていくかなり多くの小劇場の舞台や、アンブレラ小劇場出身の役者たちの(せりふ)が気になって仕方がない。

なぜあんなにツバをとばして怒鳴り合うのか。たかが八畳間の芝居で広場の先までとどくほど喚きたて、言葉の身はさっぱり伝わらない。テンションさえ上げれば芝居をした気になるのか、ハードロックのヘッドフォンになれて耳がバカになっているのか。棒キレ、薪ザッポみたいいなセリフの氾濫だ。

私は昭和三十年代をまるまるラジオ・ドラマの製作現場で過ごした。ずいぶん昔のことになる。ラジオ・ドラマは舞台や映像とちがって、装置・背景や衣装・化粧はない。人物たちの動きもお互いの距離も、表情や感情も、すべて(せりふ)の声だけで表現するし、それで聞く人に鮮やかなイメージをかきたてなければならぬ。たとえば宮本武蔵と何某の対決の場合「抜いたな」という一言のせりふで、両者が立つ間合いから、気合、表情、内面の心理、こちらの動き、その相手が刀をサッと抜いたかソロリと抜いたかまで、こちらで表現する(こ)とが要求されるわけだ。

まだテレビ以前ののんびりした時代だから、台本の読み合わせにもたっぷり時間をかけた。内村直也氏の本で、沖

縄戦の最中に小学校の校長先生(滝沢修)が妻の死の知らせを受ける場面。滝沢さんは「うっ」と一声、嗚咽をこらえ、長い間のあといきなり号泣が続き、ようやく涙をぬぐって、静かに妻の名を呼びかけるまで、二分二十三秒とすれば、何度繰り返しても二分二十三秒。当時はまだ珍しかった家庭用テープレコーダーで自分が納得するまで稽古して、読み合わせに出てこられた。

また、八木柙一郎氏の本で、横浜のいかかわしいジキパン(乞食娼婦)と暮らしながら密航の手引きをしている、得体の知れないギリシャ人の老船乗り役に、放送が苦手で嫌がる千田是也氏大先生を無理やりお願いした。俳優座養成所出身の愛弟子にかこまれた千田さんは、案の定あがりっぱなしで、トチッたりつかえたり、マイクの位置もおかまいたし。仕方なく、お一人だけ椅子に座ったままヌキドリした。ところがあとで他の手慣れた俳優たちのせりふと合わせてみると、千田さんのここ末期ガンの祖国喪失者は、群を抜いて圧倒的な存在感で迫ってきた。

ずいぶん後になってからだが、宇野重吉さんがつくづくもらした「ラジオ・ドラマがなくなつてから役者ども」のセリフが下手になってしょうがねえ。ラジオはいい勉強の場だったのに。「なにやら年寄りの繰り言めいてきた。真正正銘の年寄りだから仕方ねえ。」

(筆名・牧原純 演劇評論家)

おしらせ a r c a r t e

☆ 第8回 名作の舞台裏
連続ドラマ番組『君の瞳をタイホする』
(フジテレビ作品)

88年 1月4日〜3月21日放送
開催日 2月15日(日) 13:30、16:30
入場 13:00より
(なるべくお早めに...)

◆会場 情文ホール

(横浜情報文化ホール6F)

ゲスト 陣内孝則 浅野ゆう子
大多 亮 河毛俊作 ほか
いわゆるトレンドイードドラマの代表的作品の現代的意味付けを考える。

☆ 放送人の世界 6

《佐々木昭一郎 人と作品》

開催日 3月7日、14日、21日
開場 13:00より 終演 16:00

◆会場 情文ホール

佐々木氏のラジオ・ドラマ テレビドラマから氏が選んで視・聴する。

◆新企画!

放送人の会 公開対話シリーズ

第一回 私のベスト番組

白坂依志夫 『東芝マンモスタワー』

3月28日(日)

13時30分〜16時30分

会場 横浜情報文化センター 10F

ゲスト 白坂依志夫

聞き役 大山勝美

上映 『マンモスタワー』

(企画・演出 石川 甫 脚本・白坂 依志夫 出演・森雅之 森繁久彌)

◆新会員紹介◆ (入会順)

- 岸田功 元日本テレビ 放送学
- 齋藤守慶 毎日放送名誉会長相談役
- 磯村健二 元テレビ朝日
- MODERATO 取締役
- 中田美知子 FM北海道東京支社長
- 深町幸男 元NHK芸能局 演出家
- 和田光弘 NHK学園顧問
- 井上良介 テレビ高知東京支社
- 木元教子 ニューズキャスター
- 西ヶ谷秀夫 元フジ 社教担当
- 島地純 元QR ドラマ演出 露演劇
- 宮川鏡一 テレビ東京制作社長
- 永守良孝 RKB毎日東京支社長

サロンド ほろろうしん

むきむきに蛙のいとこはとこ哉 一茶

投書II「当会は外づらは良いのだが、ウチ面が見えてこない。折角の集まりゆえ月一か各月一回、集まる場所を指定して、飲むもよし、歌うもよし? 書生風に談論風発もよし、温泉旅の計画を語るもよし、2次会に向かつて流れ解散するもよし、残り少ない(多い?)生涯貯金を引き出し合わぬか」
酒仙坊梅之助

南船 北馬

「面白いテレビ」からの脱却

土居原作郎

映像が茶の間でいつでも見ることができるといふ驚きの瞬間から五十年が経過した。爾来、相次ぐハード中心の日進月歩により、例えば小型化したテレビカメラは地球の隅々にまで入り込むようになった。

溢れる情報の量産体制の中、「私はテレビを見ません」という人が現れてきた。「百本以上見て、これは良かったと思える番組は一本か二本しかない。それは時間の無駄だ」とおっしゃる。又、ビデオの発達もまたらした弊害に集中力の低下がある。どうせビデオにとつてるからと、オンエア時、集中力を働かせて見ようとなしな傾向にある。勢いどつちつかずの、ながら視聴を助長するハメになつてゐる。

各放送局は、視聴者の動向を知ろうと、モニターを活用したり、視聴者の意見を直接聞く方法として、視聴者会議、あるいは専門モニターによる特定番組の依頼、各地域代表の

学識経験者による番組審議会など、様々なご意見を伺う制度を設けてゐる。しかし各局が視聴者をどれだけ真剣に育てようとしてきたのか。「視聴者教育」という視点がすつぽり抜けてゐるような気がしてならない。総合性、統合性を意識してテレビそのものに正面から立ち向かう気力に欠けてゐるように思われる。

限られた番組しか見ない、テレビフリークの青年達。そのことは出演者の側にも同じことが言える。自分に関心のある、又、あてがわれた番組の中でしか語ろうとしない人々。勿論、断片的集合体がテレビそのものであることから言えば無理からぬことでは、が、パブルがはじけた今、成熟社会を経験してきたことが、少しも生かされてゐない、成長してゐない現実がある。

NHKニュースのように、極力事実を伝えることに専念して、面白くはないが役に立つ、ためになるといふような番組枠はまれである。ニュースに限つていへば「ニュースステーション」が崩してきたと言えるだろう。他局では「面白くなければテレビじゃない」のキャッチコピーがもてはやされ、とにかく面白ければ何でもオーケーの方向各テレビ局の番組が雪崩れ込んでゐた。

そろそろ作り手の努力を感じようとなしな、面白ければ何でもいいという処から脱け出してくる番組がもつとあつてもよいのではないか。今の時代、生まれた時からテレビがあ

る。お年寄りには死ぬ時またテレビを見てゐる。日常生活の必需品とも言えるテレビ。その放送メディアは、そもそもラジオから始まつてゐる。生まれた時からテレビを見てきてゐる幼児には小学生同様、言葉から伝えていつてもよいのではないでしようか。生涯にわたつてテレビが存在しつづけることは、大学教育、大学院教育の中で、理念的なことを学ぶ必要性が出てきたということではな

い。か。つて大宅壮一が言つた「一億総白痴化」から本気で脱け出す努力が、今切に求められてゐるのではないでしようか。

(日本放送芸術学会・会長)

「奥能登 女たちの海」

赤井 朱実

昨年に制作したドキュメンタリー番組「奥能登 女たちの海」がFNSドキュメンタリー大賞をで優秀賞を受賞することができた。

去年の暮れ、受賞の一報が入つた時は、これで良い新年を迎えられる「やっただあ」と両手を挙げた。しかし、上司は開口一番「賞金はいくら?」と言つた。「おめでどう」より先に「賞金はいくら?」はないだろ

う、とがっかりした。

しかし、嘆いてばかりはいられない。この言葉は、現在のローカル局

の厳しい経営状況を反映してゐる。私も内心、「これで何とか番組で出した赤字分を補填できる」と胸をなでおろしたのだから。

「奥能登 女たちの海」は、能登半島の輪島市海士町(あままち)で暮らす海女の生活を一年間撮影したドキュメンタリー。海と共に人生を歩む海女の暮らしを記録してみたい。というのがこの番組にとりかかつた動機。

ところが撮影に入つてみると、私達を待つてゐたのは、海女の社会の閉鎖性と過酷な自然環境だった。それでも輪島へ通いつめて1年ほどたつて、ようやく顔見知りになつた海女さんたちが私達を受け入れてくれた。78歳で現役の海女、60歳で働き盛り、高校を卒業してこれからプロの海女になろうという18歳。ようやく出会えた三人の海女。しかし、その後は波の荒い日本海が待ち受けていた。

夏は日照りと船酔い。勿論だが海へ出た日が必ずしもいい映像を撮れる条件が整うとは限らない。結局、何十回も漁船に乗つた。そして冬も雪の降る中で海女が潜るとは想像もしていなかつた。でも彼女たちはたくましく、雪なんて気にしてはいない。そうなるどころかも負けてはならじと何度も厳冬の日本海に挑んだ。やつと撮影できる雪の舞う中で海女漁。

心臓病を患い医者に海に潜るのをとめられても、懲りずに潜る78歳の

海女。「海にお金が落ちているから、海は大好き」という60歳の海女。学校の先生に成績優秀だからと進学を勧められても躊躇せず海女の道を歩む18歳。みんな本音で、揺るぎのない人生を送っている。

何度か挫折しそうなこの仕事をのりきれたのは何と言っても海女さんたちの魅力とバイタリティーだった。デジタル化の中でなぜか年々削られる番組予算。制作する足元が揺らぐことは多々あるが、そんな気持ちもなだめてくれるのも常に取材で出会った人たちだ。(石川テレビ)

85・8・12 休暇先で

大村公夫(投稿)

1985年8月12日夕方、その頃私は文化放送報道部で『ワールドホットライン』という国際報道番組を担当していた。まだラジオに力が充分に残っていた時代で、七人の担当者のうち誰か一人は短期ではあるものの海外へ移動特派員に出ているのである。

こうしたなか、久しぶりに長期の夏期休暇がとれたため家族と局の契約別荘へでかけた。

明日は東京へ戻る夕方、ビールを飲み、子供たちと思い出作りにと、線香花火を楽しんでいた時、妻が「あ

なた、飛行機が落ちたらしいわ」。多少酔っていた私は「アア飛行機は落ちるものだよ」「近くらしいわよ」

妻の言葉で酔いも一瞬に醒め、社に電話を入れたところ、JAL123便の遭難を知ったのである。第一報での墜落場所は『長野県南相木村の山中』だった。私の居た所は長野県富士見高原で、直線にしてほぼ30数キロしかない。当時は携帯電話など一般的には普及しておらず、またテレホンカード使用の公衆電話もなかった。まさきに頭に浮かんだのは通信手段の確保であった。別荘の管理人に事情を話し、ありったけの十円玉を両替してもらった。公衆電話である。

記者魂に押し出されたといえればカッコいいが、気がつけば車を運転して小海線沿いの道を南相木村に向けて飛ばしていた。最新の情報を得るために村の駐在に駆け込んだものの、警察官はもとより無人の状態。改めて今度は消防署の明かりが見えたので飛び込むと『南じゃなくて北』相木村らしい』という。北相木村役場に漸く到着すると、地元消防や警察が既に捜索のため山に向う最中だった。夜8時過ぎどこの局より早く「現場からの第一声」が私の声で文化放送から流れた。

そうこうするうち、お盆のため帰省中のNHK外信部の元カイロ支局長の柳沢氏、また奥さんの実家に遊びに来ていたテレビ東京(当時東京12CH)外信部の倉持氏の姿が村役

場に現れた。遅れること30分弱、これまた高崎市に帰省中の文化放送の大河原記者が高崎で降りずにそのまま現場に合流してきた。奇しくも在京3社の外信部記者が勢揃いした次第である。

4人が長期戦を覚悟したとき、まず通信手段の確保が先決と衆議一致し、最も若かった大河原記者がその任に当たり、臨時回線18回線を3社共同申請し確保したものである。18回線のうち、文化放送用に3回線、NHKに6回線、12CHに6回線、残り予備と決めた。つまり遅れてやってくるであろう他社のために武士の情けで余裕を持たせたのである。

その後、地元紙や地元局が陸續と集まって来た。その時、長野県警記者クラブの大ボスと言われていた信濃毎日新聞の某氏が「ここは長野だ。みんな集まれ」；私も柳沢氏も倉持氏も、取材やオンエアに忙殺されている中で理不尽な談合に、回線を確保した大河原氏が激怒したのである。普段は温厚な彼がこれほど激昂したのは後にも先にもみたことはなかった。一種の記者クラブの弊害がこんな修羅場にもでてきたことに啞然とした。この騒動も各社との無線車が到着するうちにウヤムヤになっただが、いまだに忘れられない。

で、夜が明けなければ危険だ。徹夜の取材中ようやく現場は長野県側ではなく、群馬県側との情報が入り、急遽北相木村から取材本部は群馬県の藤岡に移された。こうしてJAL123便墜落事故発生後の長くて短い一日が終わったのである。

その後の惨状、川上慶子さんの救出劇、ご遺体の確認、事故原因の究明などについても、長期にわたる取材が続いたのはご存知の通りである。(元文化放送報道部。御会の会報を讀んで投稿させていただきました)

会員新刊著作欄

牧原 純著『チエーホフ巡礼』

一九〇四年。一月、『桜の園』モスクワ芸術座にて初演。七月二日転地療養先南ドイツのホテル・ゾンマーにて死去。四十四歳。今年チエーホフ没後百年にあたる。劇団民芸のチエーホフ劇翻訳者として知られ、ラジオドラマの演出家でもあった著者が、チエーホフの「旅」に重ね、ロシア横断の壮大な足跡を「チエーホフとの《逢い引き》」として追った記録。チエーホフ愛好家必読の書。長年『悲劇喜劇』で連載され、単行本化が待たれていた異色作。(本名・島地純) 会員。晩成書房(二千円)

会員名簿

合川 明 青木裕子 赤井朱美 秋田完 新井和子 案案城 格 有馬哲夫 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野
 恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上欣也 井上良介 岩澤敏 岩下恒夫 上田千秋 上野 満 碓井広義
 歌田勝彦 宇野 昭 生方恵一 浦田彰 江口展之 遠藤利男 遠藤ふき 大蔵雄之助 太田敬雄 大原れいこ 大山勝美
 岡 弘道 岡崎 栄 岡田晋吉 緒方陽一 小川秀夫 沖野暁 荻野慶人 小田昭太郎 加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 片島
 紀男 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一 河合 肇 川口和
 久 川口健一 川口幹夫 河崎 勲 川尻順一 川竹和夫 川野楠巳 川平朝清 河邑厚徳 河村正一 岸田 功 北川泰三 北
 川 信 北出 晃 北村美恵 北村充史 木村栄文 木村成忠 木元教子 楠美 昌 工藤英博 小出五郎 児玉久男 児玉孝光
 後藤多聞 近藤 晋 今野 勉 斎藤伸久 斎藤守慶 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江 正 坂元良江 桜井 均 桜井元
 雄 迫田朋子 笹川紀久雄 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤利明 佐藤 年 沢口真生 澤田隆治 重延 浩 静永純一 渋谷康生
 島地 純 島野功緒 清水 満 下川靖夫 下重暁子 習田 豊 城 菊子 菅野高至 杉澤陽太郎 鈴木昭典 鈴木道明 鈴
 木紀郎 鈴木典之 須磨 章 せんぼん よしこ 高尾正克 高島秀之 高橋一郎 高橋啓 高橋 泰 滝 大作 武田光弘 武
 谷雅博 田澤正稔 只野 哲 田中昭男 田原英二 田原茂行 千葉 勉 露木 茂 鶴橋康夫 土居原 作郎 戸崎雄雄 戸田
 桂太 外崎宏司 土門正夫 中川幸美 中島 僚 中田美知子 中谷英世 中津川 輝夫 長沼士朗 長野克亮 中村克史 中
 村季恵 中村耕治 中村美美子 永守良孝 難波秀哉 西ヶ谷秀夫 西田善夫 丹羽美之 根津武夫 野崎 茂 野田宏一郎
 萩野靖乃 橋口義春 林 勝彦 原田庸之助 原 由美子 久野浩平 備前島文夫 一杉丈夫 深町幸男 福田雅子 深町幸男
 藤井 潔 藤井卓雄 藤井チズ子 藤代勝博 藤田晋也 藤田道郎 藤久ミネ 星田良子 堀川とんこう 松浦幸一 松尾羊
 一 松田輝雄 松平定知 松前洋一 松本 明 松本 修 松本国昭 三上 章 水上 毅 水野憲一 満島保夫 三村景一 三村
 千鶴 宮川鑛一 宮脇敏雄 明神 正 村上紘一 村上雅通 村上佑二 村木良彦 銘苅栄昌 桃井 章 森川時久 矢島良
 彰 藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保 山崎 裕 山路家子 山田良明 山田 尚 大和定次 山名光紀 山根基世 山辺麻未 山
 本恵三 山本隆則 湯浅和憲 横山英治 吉永春子 吉村直樹 吉村 誠 和田智允 和田光弘 和田洋一

(2004・2/10現在)

連載 放送界多頻語事典

新調査冗報 2月号

- ◆ キャラ：キャラクターの略。ゲームのキャラクター転じて「新人のXXX子、キャラが立ってるね」「ベッバラ(深夜バラエティー)むきたな」「いやキャラ負けだわよ」とアナ室の古狸と古雌狐が爪を研いでる。
- ◆ バミる：カメラ位置に印をつけること。AD経験者の会員には懐かしい動詞。朝から晩までバミばかりし、やってられねえとおでん屋で荒れる古参ADはウワバミと言う。
- ◆ キムタク語：ヤバイ、ブツチャケ、テューカ、イケテル、マジかよ、メービー、ユーハヴ?などドラマではやらせた。そのうちキムタク語講座が設けられるかもみたいな。
- ◆ 元カレ：ドラマの題名が発展して元パパ・元ママの老後離婚組もあれば、先輩やOBは「元社のヒト」と遠目で敬遠されたりする。
- ◆ レンブランド：といっても泰西名画でなく照明用語。「監督、男とナニのからみはレンブランドでいきましようや」と照明さん。光源を斜め下に当て影でオッパイを強調する!
- ◆ アタマ&ケツ：やくざ用語は「あたまを取る」(出入りで相手の親分を始末すること)「ケツをまくる」(居丈高になること)。転じて「アタマ(出だし)はス(読み)でゆけど、XXX子(女子アナ)のケツがこぼれるかな(後CMの時間が厳しい)」と使う。放送局は便所じゃありません。

(四谷亭鶯歌蝶)

☆ 編集後記 ☆

◆ 如月、なにを今更年賀状特集でもあるまい。でも毎日が日曜日の幸せでおめでたい人もいなくはない。以前年賀状コンクールがはやり、マスター宛年賀状から最優秀を選び賞品がボトル一本なんてイキな会員制バーがあったつけ◆桃井章さん(会員)が広尾から交通至便の乃木坂に進出(乃木神社前)して新生(CO REDO)を開店した由。小イベント向きなスペースもあり、新作Vや自慢の旧作Vを眺めつつワインを：以上「店長」にご相談ください。マンハッタンじゃなく「ノギザカ・ラブ・ストリー」で、ジジイ大好きなんてオネエもいるかも◆バーといえは原田庸之助さん(会員)入り浸りの『しもせん』(数寄屋橋)は俳句バーに変身した由。春めきて、いや啓蟄や、ウームと長考で売上伸びないのとちゃう? 店長の元AD下善チャン、どうする◆変身といえは伊藤雅浩、鈍子のはずれのフルートに見切りをつけ、目下舞台台本作家に変身中。さるNPO的小劇団の目にとまり採用され、原稿料入った由。やっば如月はめでたいのだ。

(松尾)

本会報の無断転載はお断り
 ただし相談あれば転載歓迎

☆ 新会員の応募受付けてます。本会も今年で数えて7年目を迎え、活発な日常活動で放送界で全国区的存在感を得ています。是非ご参加を!